

秋草俊一郎『「世界文学」はつくられる 1827-2020』

安原 瑛治



秋草俊一郎著

『世界文学』はつくられる 1827-2020 (東京大学出版会 2020年7月)

本書は、英語圏の主要な「世界文学」論を日本に紹介してきた比較文学者、秋草俊一郎氏による、待望の「世界文学」論である。浅学な評者の知るかぎり、これまで、日本において、「世界文学」論とはなんともいっても「紹介」の対象だった。それゆえ、従来の議論を消化し、それに応じるような著作が日本の学术界にあらわれたことは、まことに意義深いのではないだろうか。

本書はふたつの読みに開かれている。第一に、日本、ソヴィエト、アメリカ合衆国における「世界文学」受容の構成性を分析した、包括的かつ実証的な研究として。それから、「世界文学」にかかわる様ざまな個人をえがいた、興味深い物語として。全体性と個人の弁証法が、本書に、独特な魅力をあたえている。こうした特徴は、秋草氏の研究哲学に負うところが大きい。秋草氏はこう言う。

そして世界文学的な関係性の構築に携わっているのはなにも作家だけではなく、研究者や翻訳家、編集者もそうだと言える。彼らのほとんどが世間的には無名で、それぞれの居場所でたんとと教育や翻訳その他をおこなっているが、じつは「世界文学」はそうした人物による、きわめて人間的なプロセスによって生みだされている<中略>本書はさらに、国家や教育といった問題がそこに加わるだけでなく、対象とする地域や時代の射程もはるかに広がった。そして社会学や政治学、歴史学、翻訳研究といった部分的に参照されるアプローチの数々……。しかしこのような誇大妄想的な遠大さ、非専門分野に飛びこんでいく無謀さ、なんにでも首を突っこむ節操のなさと同時に、ほかの学問にはあまりない文学研究の特質——自由さであって（ときに無責任に墮してしまうことがあっても）、私が愛するものだ。¹

「世界文学」という抽象の背後に、具体的なドラマを見いだすこと。ある種の全体性のなかに、個人の声を聴きとること。秋草氏は、いっけん堅実な研究書である本書に、「人間的なプロセス」をささえる翻訳者や編集者、「遠大な」読みを試みる研究者にたいするまなざしをひそませている。

そして重要なのは、「世界文学」を論じつつも個人をわすれないこのアプローチとは、それじたい、氏の「愛する」「自由さ」の実践にほかならない、ということだ。本評では、これらふたつの側面（全体性と個人）に目を向けながら、『「世界文学」はつくられる』を概観したい。

1. 「世界文学／枠組み」形成のプロセス——日本、ソヴィエト、アメリカ合衆国の場合

『「世界文学」はつくられる』が採用するのは、「文化の三点測量法²」である。日本、ソヴィエト、アメリカ合衆国において「世界文学」という受容の枠組みがいかにか構成されたのか、それを秋草氏は丁寧にひもといていく。その仔細な分析を追うことは本評の目的ではないが、ひじょうに簡単にまとめれば、これら三国において「世界文学／枠組み³」を決定するのは、それぞれ、マーケット（日本）、政治体制（ソヴィエト）、学術機関（アメリカ合衆国）だということができる。

第Ⅰ部で詳述される日本の事例にかんしては、読者の多くが体験として納得することだろう。明治時代に端を発する日本の「世界文学」受容は、日本と西洋の関係と平行である。すなわち、西洋とは、明治期には学びの対象であり（内村鑑三は西洋的「大文学」の受容を主張した）、第二次大戦期には国威高揚のために張り合う相手だった。こうしたコンテクスチュアルな変遷のなかで、一貫して日本の受容を特徴づけてきたのが、教養のコモディティ化である。「スーパーエディター」木村毅（1894～1974）が手がけた新潮社版『世界文学全集』（1927～1932）、アメリカ・ソヴィエト文学を積極的にとりいれた河出書房のグリーン版『世界文学全集』（1959～1966）、いまだ記憶にあたらしい池澤夏樹による河出書房版『世界文学全集』（2007～2011）、これらあまたの全集たちは、時代にそくした教養を提供する商業的な企画だった。まさしく、日本の「世界文学／枠組み」は、「教育ではなく出版産業と強く結びつき、大衆文化をつくっていた⁴」のである。

『「世界文学」はつくられる』第Ⅱ部は、ソヴィエトにおける「世界文学／枠組み」形成のプロセスを描出する。1917年の十月革命で産声をあげたソヴィエトは、新興国のレジティマシーをしめすために、「世界文学」の網羅的な紹介をこころみた。その端緒となったのが、作家マキシム・ゴーリキー（1868～1936）が設立、運営した、「世界文学出版所」である。「出版所」のユートピアンな夢は、政治的な理由によりとげられずにおわるも、やがて、浩瀚な『世界文学叢書』（1967～1977）に引き継がれた。計二百冊からなる『叢書』は、広大な時代と地域を視野におさめる、圧倒的なスケールをほこった。

共産主義国家にうまれたこの「世界文学／枠組み」には、独特の功罪があった。一方では、マーケットを逸脱することがゆるされたために、連邦内の少数民族の文学作品を、ひろく紹介することができた。多様性を重視する「アフーマティヴ・アクションの帝国⁵」としてのソヴィエトの「寛容な」振る舞いは、じっさい、キルギス出身の作家チングス・アイトマトフ（1928～2008）の世界的評価にもつながった。他方、政治というべつなロジックがはたらいたために、「世界文学／枠組み」の担い手たちは、つねに政権との緊張関係をしいられた。先述のゴーリキーはそれゆえ亡命し、『叢書』の作品選定には、「社会主義リアリズム」という不可侵のクライテリオンが見えかくれしている。

評者をふくむ文学研究にかかわる人々にとって、とりわけ興味深いのが、第三部のあつかうアメリカ合衆国だろう。なぜなら、今日的な意味での学問としての「世界文学」は、合衆国で生まれたからである。秋草氏は、ここで、学問としての「世界文学」の来歴と、その課題を指摘している。「世界文学」の「母校」は、ウィスコンシン大学マディソン校である。中西部という独特な地政学的条件（東部でも西部でもない、学問的な真空地帯）に個性的な教員たちがあいまって、同地で偶発的にうまれた「世界文学」は、やがて、大学教育の一環として制度化されていく。こうしてうまれたのが、教科書にあたる「世界文学アンソロジー」である。

秋草氏がおもに論じる「アンソロジー」は、『ロングマン版世界文学アンソロジー』と『ノートン版世界文学アンソロジー』である。『ロングマン版』は、西洋のカノンと非西洋のカノンの有機的な組み合わせを志向したものであり、両者のあいだに影響関係を想定するのではなく、「共鳴（レゾナンス）」、「視点（パースペクティヴズ）」といった概念によって、ゆるやかな共振を聴きとろうとする。他方、『ノートン版』は、収録作品の多様性を担保するとともに、そうした教材をあつかうためのウェブサイト（教師に授業のガイドラインをあたえている）を充実させることで、高い教育効果をねらう。それがはっきりとみてとれる例が、沖縄出身の小説家久志富佐子（1903?～1986）である。久志は日本では知られていない作家だが、ここでは、「琉球人」、「女性」といったマイノリティ性ゆえに、『ノートン版』に選出されている。秋草氏は、大学教育を念頭においた『ノートン版』が、「教えやすさ」を重視するあまり、アイデンティティ・ポリティクスに傾いていることを危惧している⁶。

2. 「世界文学」論は「つくられる」——ニコライ・コンラドを「相続」する

上に概観した「文化の三点測量法」の意義は、「世界文学／枠組み」の構成性を指摘したことにある。それは、たとえば、パリを中心とした「普遍的な」ヒエラルキーを想定するパスカル・カザノヴァ『世界文学空間』（1999）にたいする有効な反証でもある⁷。しかし、忘れてはならないのは、本書の秋草氏は、たんなる相対主義におちいることなく、「いまからはじまる⁸」「世界文学」論にむけて、建設的な提言をしている、ということだ。冒頭にふれた「自由さ」とは、未来にひらかれた「世界文学」論の可能性でもある。以下では、本書に描かれる個人の物語に着目しながら、この可能性を看取していきたい。

デイヴィッド・ダムロッシュ、フィロ・メルヴィン・バック・ジュニア、佐伯彰一、本書に登場する文学研究者たちは、いずれも、「遠大な」「世界文学」論を展開する、魅力的な人物としてえがかれる。なかでも、多くの読者に耳新しいと思われるのが、第Ⅱ部第二章、第三章でえがかれる、ソヴィエトの東洋学者ニコライ・コンラド（1891～1970）である。リガ（現在のラトビアの首都）に生まれたコンラドは、ペテルブルグ大学、東京帝国大学にまなび、十月革命後、ソヴィエト国内でアジア文学の研究者として活躍した。コンラドの業績で特筆すべきは、「東洋のルネサンス」という文学史観である。1955年発表「歴史学における「中世」、翌年発表「世界文学史の若干の諸問題について」にて表明されたこの学説は、つづめていえば、「世界文学」における形式の類似性を、影響関係ではなく、社会の下部構造により説明するものだった。西洋中

心の文学史観では、中心（西洋）から周辺（非西洋）への直接的な影響の伝播が想定されている。しかし、コンラドの考えでは、この「伝播」（コンラドはこれを「波」と呼ぶ）は、下部構造とむすびついているため、より間接的な仕方です。「世界文学」に生じている。そして、コンラドが評価したのが、資本主義へと移行しきっていない時代（八世紀から十二世紀）のアジアの文学だった。この特権的な時代を、コンラドは、西洋の区分にならって、「東洋のルネサンス」と呼んだのである。

非資本主義文学を称揚するとともに、マルクス主義的枠組みの汎用性をしめした「東洋のルネサンス」は、ときの政権に、プロパガンダとして利用されることもあった。そして、論の細部の粗さもありまって、残念ながら現代ではあまり評価されていない。しかし、本書で興味深いのは、秋草氏がコンラドの理論にアクチュアリティを見出している点である。秋草氏は、コンラド流「波」が、フランコ・モレッティ（『遠読』の著者）やデイヴィッド・ダムロッシュ（『世界文学とは何か？』の著者）といった今日の「世界文学」論者の思想と共振することを指摘する。秋草氏はこう述べている。

モレッティもダムロッシュもコンラドの論を読んでいるわけではないだろうが、西洋の識者が（無意識的に）西洋的な枠組みを他地域にあてはめてしまう例は後を絶たず、そのなかでマルクス主義的な枠組みが採用されることは少なくない。現在、「世界文学」についてあらためて考えるうえでも、コンラドの仕事を検証することの意味は少なからず残っていると言える。⁹

ここで秋草氏が言う「検証」の内実は、かならずしもクリアではない。それは、いかなる「世界文学」論として具体化しうるのだろうか。

この「検証」は、フェン・チャー（Pheng Cheah）の *What is a World?: On Postcolonial Literature as World Literature*. (Duke UP, 2016) と比較できるのではないかと評者は考える。なぜなら、チャーの著書は、下部構造が文学を決定する「マルクス主義的な枠組み」を援用しつつ、対象をルネサンスという「西洋的な枠組み」にあてはめないことを目指した、ひとつの実践だからである。チャーの理論は、大きく分けてふたつの思想からなる。先行する「世界文学」論への批判と、「世界文学」における「他者」の肯定である。まず、チャーは、モレッティ、ダムロッシュ、カザノヴァを批判する。なぜなら、彼らは、「世界文学」をマルクス主義的な流通の比喻で理解しているが、どうじに、作品にたいする流通の優越を想定しているからである（そもそもマルクスが流通を固定的なものとしてとらえていないことをこうした論者たちは見逃している、とチャーは述べる¹⁰）。グローバル経済に支配された「地球 the globe」ではなく、それに抗する可能性に開かれた「世界 a world」こそ、文学作品が体現すべき存在なのであり¹¹、「世界文学」論は、そうした作品に目を向けるべきである。

それでは、いかに文学はグローバルリズムを逸脱する「世界」の「開かれ」をしめしうるか。チャーは、ジャック・デリダを引きつつ、こう説明する。デリダは、時間性（temporality）があらゆる

人間のコントロールをのがれた「ラディカルな他性 a radical alterity」であると述べた。なぜなら、時間性もたらす現在 (the present) という時間は、時間軸の一点であるとうろくに、それまでの時間 (過去) を逸脱しうる、「他なるもの the other」として存するからである¹²。それゆえ、この「他なるもの」としての現在の予測不可能性は、既存のヒエラルキーをのがれるべつな「世界」の「開かれ」(これをデリダは、グローバル化ではなく、「列の世界化運動 altermondialisation / an-other worlding¹³」とよぶ)の可能性をつねに担保する要素である。この論に立脚して、チャーは、グローバル・サウスの作家たち (インドのアミタヴ・ゴーシュ、ソマリアのヌルディン・ファラなど) を分析していく。具体的な作家論のなかで、チャーが評価するのが、「非人間的な地質時間 nonhuman geological time¹⁴」である。それはすなわち、だれの所有物でもない、人知のおよばない「究極の下部構造」ともいえる自然、そして、その自然を到来させる「時間」である。人間の生産物である文学作品とは、逆説的に、人間の手に負えない力の存在と、「もうひとつの世界」の到来可能性を暗示する、稀有な媒体にほかならない。¹⁵

西洋中心的ヒエラルキーを批判し、グローバル化を相対化する作家たちに本来的な「世界文学」を見いだすチャーの振る舞いは、資本主義以前のアジア文学に「ルネサンス」を見いだすコンラドのそれにかさなる。もちろん、チャーのように反ネオリベラリズム文学を論じる手法はひとつの方法にすぎず、べつな仕方でも、批判的に「世界文学／枠組み」の西洋中心主義をとらえることはできる。そして、評者が考えるに、それは本書の秋草氏が実践したことでもある。

ところで、本書第Ⅱ部のタイトルは「マルクスの亡霊たち」という。『マルクスの亡霊たち』で、デリダは、ソヴィエト崩壊後にマルクス主義を「相続」することを説いたのだった。デリダはいう。「かりに遺贈物の読解可能性が所与のものであり、自然なものであり、透明であり、一義的であったならば、かりに解釈を要求すると同時に解釈を拒むということがなかったならば、遺贈物を相続する必要はないということになるだろう¹⁶」。秋草氏はいかにコンラドを「相続」するのか、その「読解可能性」は、いかに受けとめられるのか。そして、「三点測量」の向こうには、いかなる「世界文学」論が「つくられる」のか。こうした考えを巡らす愉しみを読者にゆるす本書は、稀有なまでに開かれた一冊である。

注

1. 秋草『「世界文学」はつくられる 1827-2020』、19-20 頁。
2. 秋草『「世界文学」はつくられる 1827-2020』、374 頁。
3. 本書において、秋草氏はいっかんして、「世界文学」という括弧つきの表記をもちいている。これは、世界文学という概念を異化し、その定義が所与のものでないことをしめす、ひとつの戦略である。秋草氏は、「世界文学」という表現で、作品の集合としての「世界文学」と、受容の枠組みとしての「世界文学」の双方を言い表しているが、本評では、便宜のために、後者を「世界文学／枠組み」という語で併列する。
4. 秋草『「世界文学」はつくられる 1827-2020』、88 頁。
5. 秋草『「世界文学」はつくられる 1827-2020』、205 頁。

6. 秋草『「世界文学」はつくられる 1827-2020』、350-60 頁。秋草氏じしんが「世界文学アンソロジー」の編者でもあることも、こうした問題意識の一因なのだろう（『世界文学アンソロジー： いまからはじめる』（三省堂、2019 年））。秋草氏は、講演『「世界文学」はつくられる 1827-2020』（東京大学出版会・2020）を読む、語る。（2020 年 10 月 31 日、第 5 回現代文芸論研究報告会、於・東京大学本郷キャンパス）で、「アンソロジー」を編むさいに、「理想」と「現実」（収録作品の著作権料や出版社の予算）のバランスに苦心した、と発言している。ここでの「現実」とは、おもに経済的な要素であり、つまりはマーケットに規定される日本の「世界文学／枠組み」に特有の現象だといえるかもしれない。
7. カザノヴァは、ヨーロッパでナショナリズムが勃興したロマン主義の時代に、フランスが普遍的な文学的権威を確立させた、と述べている。カザノヴァ『世界文学空間』、49-50、59-61、108-110 頁を参照のこと。
8. 本書終章の副題。
9. 秋草『「世界文学」はつくられる 1827-2020』、256 頁。
10. Cheah, *What is a World?*, p. 69.
11. Cheah, *What is a World?*, p. 37.
12. Cheah, *What is a World?*, p. 165.
13. Cheah, *What is a World?*, p. 174. なお、「別の世界化運動」という訳語は、チャー「デモクラシーの時ならぬ秘密」における藤本一勇氏と澤里岳史氏の日本語訳からの借用であることをおこわりする。
14. Cheah, *What is a World?*, p. 232.
15. 本評では詳述できないが、チャーは、この発想を、デリダのほかに、マルティン・ハイデッガーとハンナ・アーレントに負っている。ハイデッガーからは人間を超越し世界を形成する要素としての「時間」という発想を、アーレントからは世界を変革しうる人間的芸術としての文学という発想を、それぞれ得ている。それぞれ、Cheah, *What is a World?*, pp. 110-12, および pp. 151-52 を参照のこと。
16. デリダ『マルクスの亡霊たち』、50 頁。

文献

Cheah, Pheng. *What is a World?: On Postcolonial Literature as World Literature*. Duke UP, 2016.

秋草俊一郎『「世界文学」はつくられる 1827-2020』東京大学出版会、2020 年。

秋草俊一郎、戸塚学、奥彩子、福田美雪、山辺弦編『世界文学アンソロジー： いまからはじめる』三省堂、2019 年。

カザノヴァ、パスカル『世界文学空間： 文学資本と文学革命』岩切正一郎訳、藤原書店、2002 年。

チャー、フェン「デモクラシーの時ならぬ秘密」『デリダ 政治的なものの時代へ』チャー、フェン、スザンヌ・ゲルラク編、藤本一勇・澤里岳史訳、岩波書店、2012 年、85-125 頁。

デリダ、ジャック『マルクスの亡霊たち： 負債状況＝国家、喪の作業、新しいインターナショナル』増田一夫訳、藤原書店、2007 年。